日常的しぐさから“神話的”身ぶりへ

野　村　雅　一

私は，舞踊学会の会員でもありませんし，舞踊は機会があれば見るという程度なのですが，今回，日常的動作から舞踊へという関係を見直してみるのにあたって，「何か話せ」ということで参りました。まず，ビデオをみてほしいと思います。

Diego Carpitellaというイタリアの民俗音楽学者がつくったもので，私どもの国立民族学博物館にもらっています。“Kinesic patterns and Traditional Behavior in Italian Social Context”という題がついていますが，イタリアのナポリとサルデニア島という二つの地域の日常的動作の違いがダンスの上にも同じようにあらわれることを示しています。

《ビデオ鑑賞》

今ご覧いただきましたように，同じイタリアでも，日常の身ぶりや動作に，地域によって対極的な相違があり，それがそのまま舞踊の中にも反映していることがおわかりいただけたと思います。民俗舞踊は日常の身振りやしぐさ，からだの構えや姿勢が型になって成立するという一例になるかと思います。歩くとかあいさつをするとかいう日常的動作は，コミュニケーションのためにではなく，それなりの実際的な目的があってするものです。その動作の意味を他の人に伝えるためには日常的動作のある種の“誇張”“様式化”“コード化”が必要です。「こうしているのにだ」ということの伝達性を高めるには，しぐさの演技性が求められます。そしてまた，演技することによって日常とは離れた演技空間が生れます。たとえば，先ほど発表された板谷徹氏の「〈行動としての舞踊〉について」でのビデオ「湯立神楽」の動作は，日常的，実際的にやろうと思えば，もっと手っ取り早く出来るわけです。しかし，それをよりコミュニケイティブにするには“誇張”“様式化”が必要になってきます。その一形態として舞踊（ダンス）というものが出てくるのだと思います。ただ演技というだけなら，広い意味の“演劇”といもので解決するのですが，舞踊というものにはさらにリズムに基づいた様式化が必要になります。なぜそうしたリズム的様式化が必要なのかというと，人間の社会の合目的な相互連関，日常の実際的な意味伝達，そういうものを越えたところの人間の交流のために必要なのだと思います。

人間の実際生活は“何をするか”ということで成り立っていますが，しばしば“いかにするか”ということが“何をするか”よりも大切なことがあると思います。そこでリズムに合わせて踊るということを“コード化”して，舞踊という形式をつくるのだと思います。たとえば，歩行運動で，本人はA点からB点まで移動を目的にしているのですが，それを目にする他の人にとっては“いかに歩いているか”が重要で，そのことに注目します。“いかに”という“コード化”では現実を指示する第一次的な意味作用よりも，もうひとつ別のレベルの，神話化された次元が問題になってきます。別な言い方をすれば，コスモロジカルな次元であって，情緒的な交流のレベルが重要になってくると思います。あいさつは社会によってさまざまな形をとります。お辞儀，握手，キッス，それから，たばこを廻しのみする，酒をのむ，等，いろいろあります。しかし，その場合でも“何を”より“いかに”の方が大切なのです。言語で意味を伝える以外の，情緒的交流のコミュニケインが行われるからだろうと思います。もう一点申しますと，舞踊は一つの儀礼，あるいは表現であるとかんがえられています。今，発表された板谷氏の「〈行動としての舞踊〉について」は儀礼ですし，石黒節子氏の「Dance movementの意味のとらえ方」は表現です。私はもうひとつ，ダンスが大切なのは広い意味での社交の形式であるからだと思います。ビデオで見ましたように，イタリアのサルディニアの踊りでも皆で踊り合うことによって，人間と人間の交流，情緒的な交流がなされています。舞踊では，言語（認知的象徴体系）によらない，もうひとつの知性レベルでの，踊り手と踊り手，踊り手と観客との交渉が本質的なものとしてあるのではないかと思います。つまり，舞踊は“神話化”された身ぶり言語による社交の形式ではないかということです。舞踊にはリズムを踊るという面と，模写的な振りが面白い面と二つあると思います。いずれにしても舞踊の世界では，リアルなものでない表現がされると思います。つねに概念化されたものとしての表現です。日常的な動作は，舞踊に変わる時，たとえリアリズム舞踊でも，もうひとつ別なレベルに移行しています。言語では表わせない，認知的な次元を越えた，情緒的な交流のレベルで舞踊は表現され，共有されるものではないかとかんがえます。

＊1991年度春季第31回舞踊学会
『舞踊學』第14号より転載